

住民運動が切り開いた政治空間

—「サブ政治」としての勝手連がもたらしたもの—

村 瀬 博 志

1. はじめに

2000年1月23日に徳島県徳島市で行われた「吉野川可動堰計画に関する住民投票^①」は全国的に大きな注目を集めた現象であった。投票の結果は投票率が55%でそのうちの9割が吉野川可動堰計画について反対というものであったのだが、この住民投票が提起した争点は徳島県で予定されているひとつの河川事業にとどまるものではなく、日本各地の大型公共事業そのものに対する再検討でもあったからである（五十嵐・小川 2001）。「やっぱりあの川（吉野川）は残しておきたいと、…子どもたちに何が何でも残しておきたいと、そういう気持ち^②」という住民の真摯な思いからはじまり、結果的には中央—地方間の利益再配分システムとしての機能を担ってきた大型公共事業のあり方に対して一石を投じることになった吉野川住民投票運動は、この後、徳島県で生じた政治変動の季節を経験することになる。

その政治変動とは、具体的にいえば、2001年9月から2003年5月の2年にも満たない間に3回の県知事選挙が行なわれたという異例の事態のことである（安田 2003；樺嶋 2004：184-7）。2001年9月の知事選で当選した圓藤寿穂知事の逮捕および辞職による出直し知事選が2002年4月に行なわれ、さらには2002年の県知事選で当選した大田正知事に対する県議会からの「知事不信任案」を受けて、2003年5月に三度県知事選が行なわれることになった。そして、吉野川住民投票運動から誕生した「勝手連」はその3回すべての県知事選において大田正氏を支援し、「ひとりひとりの県民に支えられた知事を選ぶ^③」ために選挙活動を展開した。

それでは、吉野川住民投票運動に参加した住民たちが、運動の結果、新たに切り開いた政治空間において、勝手連という政治的アクターは何をもたらすこ

とになったのか。本稿では、政治空間の変容と関連する「オルタナティブな政治」についての議論を参照しながら、「住民運動が切り開いた政治空間において、勝手連がもたらしたものは何であったのか」という問いについて考察を行う。

2. 調査概要

まず、議論に入る前に、本研究の調査概要について述べておく。2003年4月には統一地方選挙の前半戦として徳島県議会議員選挙が行われ、この選挙に際して2001・2002年の2回の県知事選で大田氏を支援した人々が組織した「勝手連サポートセンター」は、7人の独自候補者を擁立しそのうち3名を当選させた。筆者は勝手連サポートセンターのある方の紹介を通じ、同年3月27日から4月10日にかけて勝手連サポートセンターが擁立した1人の候補者のところで選挙活動を手伝うという予備的なフィールドワークの経験を積むことができた。そして、同年5月の県知事選でも、短期間ではあったが勝手連の運動に携わることができた。このような一連の運動への参加を通じて、筆者は吉野川住民投票運動や勝手連に参加していた人々と知り合うことができ、運動参加者のうち4名の方に公式的なインタビューを行った。以下の表は、インフォーマントの内訳を示したものである。

表1 インフォーマントの内訳

名前(仮名)	性別	年齢	調査日時	備考
Aさん	女性	50代前半	03年11月25日(火)	住民投票運動に関わる前から、子どもに関する活動を行っていた。
Bさん	男性	50代後半	03年8月25日(月)	当初から住民投票運動に関わり、運動の中心的なメンバーである。
Cさん	女性	50代半ば	03年10月25日(土)	住民投票運動に関わる前から、選挙活動の経験があった。
Dさん	男性	40代後半	03年11月10日(月)	2003年4月の徳島県議選に出馬した。

また、住民投票後も継続して吉野川に関する活動に取り組んでいる方々が参加する集会やイベントにも通い、関連資料の収集なども行った。インタビューや関連資料の収集といった調査データは、4章の勝手連に対する分析で主に用いる。

3. 政治空間の変容——「サブ政治」

それでは、「住民運動が切り開いた政治空間において、勝手連がもたらしたものは何であったのか」という問いについての考察を行うため、最初に政治空間の変容に関する Claus Offe (1985) の議論をみておく。

次項の表2は、オフフェによる政治の「古い」パラダイムと「新しい」パラダイムの区分である。行為主体・争点・価値・行為様式に注目してオフフェは2つの政治パラダイムを設定しているが、このようなパラダイムのシフトが生じるのは、政治の「古い」パラダイムがもたらした功罪を背景に、「さらなる近代化に対する『近代的な』批判⁶⁾としての新しい政治的パラダイム」(Offe 1985 : 856) が生じるからである。表2でその特徴が示されている政治の「新しい」パラダイムは、さらなる近代化に対する近代的な批判として政治の「古い」パラダイムに挑戦し、その結果、政治の境界を拡張し政治空間を変容させることにもなる。それでは、その変容した政治空間においてどのような新しい政治が誕生することになるのだろうか。本稿では、その新しい政治の一形態として Ulrich Beck が論じたサブ政治 (1986=1998, 1994=1997, 1997) を取り上げる。

表2 政治の「古い」パラダイムと「新しい」パラダイムの主要な特徴 (Offe 1985 : 832)

	古いパラダイム	新しいパラダイム
行為主体	(利害のある) 集団として分配をめぐる対立に参加する社会経済集団	帰属する集合体のために行為する社会経済集団
争点	経済成長や分配、安全保障や社会保障、社会管理	平和・環境・人権・疎外されない労働形態の維持
価値	個人的な消費や物質的な発展に関わる自由や保障	中央集権的な管理に対する個人の自律性やアイデンティティ
行為様式	(a) 内部に対する行為様式 公式的な組織、大規模な代理的組織	(a) 内部に対する行為様式 非公式的で自発的なもの、低度の水平的・垂直的分化
	(b) 外部に対する行為様式 多元的で協調的な利害を仲介する政党間の競争や多数者による支配	(b) 外部に対する行為様式 主として否定的な点から形成される要求に基づいた抗議政治

ベックは個人化の進行によって異なる意味をもつ二つの政治が生じるという。そのひとつは実質的にはもはや空洞化している制度的な政治であり、もうひとつはこれまで政治的なものとは認識されてこなかった日常的で実践的な政治であり、ベックは後者をサブ政治と呼ぶ。

政治的なものが、公的権限や公のヒエラルキーを越えたところに、突如姿を現し、噴出していくのである。このことは、政治を、国家や政治システム、公的権限、職業政治家と明らかに同一視する論者たちが、とりわけ誤解している点である。(略)具体的に言えば、工業社会の政治的布置連関は非政治的なものになりはじめるが、その一方、工業主義において非政治的であったものが政治的なものになりはじめているのである。(Beck, Giddens and Lash 1994=1997 : 38-9)

端的に表現するなら、「非政治的であったものが政治的なものになりはじめている」ことを意味するベックのサブ政治は「制度政治の外側（非制度政治）の領域で生じる政治化」と言うことができるだろう。これに対して、Boris Holzer と Mads P. Soresen は、「ベックとは対照的に、政治システムとは独立して離れている社会的な影響力の源泉に関する理解が重要である」(Holzer and Soresen 2003 : 80) と述べている。つまり、彼らはサブ政治の外延を、ベックによる「制度政治の外側の領域の政治化」から、「政治システム（制度政治－非制度政治）を超えた社会（societal）との関係性」を含むものにまで拡張しているのである。次項の図1はベックのサブ政治と Holzer と Soresen のサブ政治との差異を示したものである。

本稿では、Holzer と Soresen により拡張されたサブ政治を括弧付きの「サブ政治」という言葉で表す。そして、この「サブ政治」は政治概念の変容を受けて、政治システムを超えた社会（societal）との関係性を持ち、さらにそのような関係性を源泉として、制度政治への接続の契機を有すものだとする。以下では、この「サブ政治」という概念の一形態として勝手連という現象を位置づけ、吉野川住民投票運動や勝手連における政治概念の変容についてみた後で、勝手連と政治システムを超えた社会との関係性、勝手連と制度政治との関係性について分析する。そして、それらの分析をもとに、「住民運動が切り開いた政治空

間において、勝手連がもたらしたものは何であったのか」という問いに対する考察を行う。

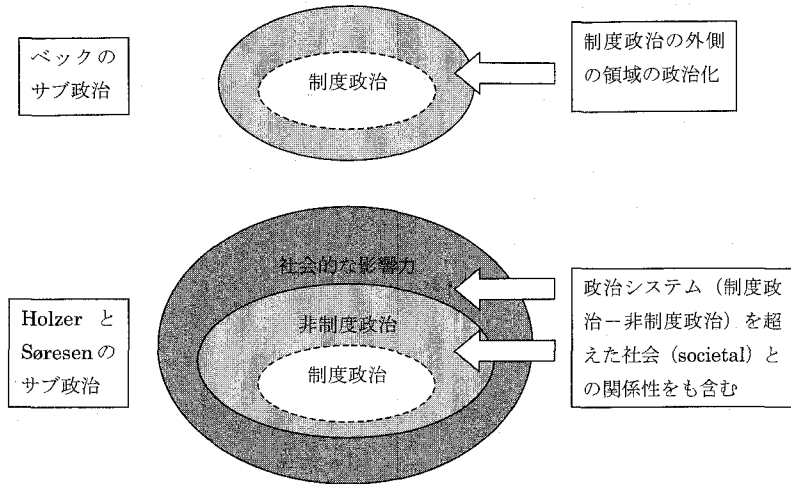


図1 ベックのサブ政治と Holzer と Soresen のサブ政治

4. 「サブ政治」としての勝手連

4.1 政治概念の変容

まず、勝手連の母体となった吉野川住民投票運動の経緯について簡単に振り返っておく。吉野川可動堰建設計画に対して疑問の声を挙げた吉野川シンポジウム実行委員会は、2000年1月に行われた住民投票について次のように述べている。

2000年1月23日は、ふるさとの将来をわたしたちが選ぶ日です。選挙の候補者に投票するのではなく、吉野川の未来と私たち自身の未来に投票する新しい政治のかたち、それが第十堰住民投票です。民主主義の醍醐味を、存分に味わってみませんか⁽⁵⁾。

吉野川シンポジウム実行委員会はこれまで住民運動とはあまり縁がなく制度

政治の外側にいたメンバーから主に構成されていたのだが、ではどのようにして制度政治の外側にいた人々がこの運動を通じて政治に関与する（し続ける）ことになったのか。当初から運動に参加していた A さんの発言をみてみよう。

本当はもうこういうの（運動）するまでは、政治ってどっちかっていうと嫌い、嫌いっていうかな、あんまりこう触りたくないっていうか、何かダーティーなものに見えてたんだけど、政治そのものが。…あの一、吉野川の運動をずっとしていつてるうちに、…ずっとやってたら、やっぱり行き着くところはそこなんです。政治を変えないと、この状況が打開できないというか、そこまで行き着いてしまったので。…そういう気持ちが強かったですね、一番最初、うん⁽⁶⁾。

はじめは政治に対する忌避感をもっていただけれども、運動に持続的に参加することによって、政治の問題へと行き着かざるを得ないと思に至るようになる。A さんは運動への参加を通じて政治に対する考え方・捉え方の変化が起こったわけだが、そのような変化は運動参加者の多くの間で共有されたものだと考えられる。また、住民投票運動での経験ではないが、このような政治に対する考え方の変化は 2003 年 5 月の県知事選に際しての勝手連の運動において筆者自身もいくらか体験したものである。参考までに、そのときのエピソードをフィールドノートから引用しておく。

2003.5.16（金） 晴れ

徳島駅の近くで選挙ビラを配ることに。平日の午後で人通りはまばらとはいえ、駅前一角に陣取ってビラを配るには、それなりの心構えが必要であった。ビラを手渡す時の言葉を何にするか少し迷ったのだが、「明後日の投票日は宜しくお願ひします」と言うことに決めた。「とにかく投票に行行って自分の意思を表明してほしい」というのが、自分の偽らざる心境であったからだ。

ビラを配り始めた当初は、若干、緊張もしたのだが、割と好意的な反応が多く徐々に慣れてきた。「大田さん応援してるよー」とビラを配る私に軽い会釈をしてくださった 50 代ぐらいの男性、「もう不在者投票を済ませ

てきたよ」と言った押し車を押す高齢の女性などが印象に残る。ただ、スーツ姿の40代ぐらいの男性に「私は、大田さんじゃないんだよ」とビラの受け取りを拒否されたりもした（丁重な断り方であったが）。また、50代半ばぐらいの男性で「選挙には行かないよ。税金の無駄遣いばかりして」といくら語気を強めて言い、自分の前に立ち止まる方もいた。普段ならそこで怯むはずだが、簡単には引き下がらず「とにかく投票に行って自分の意思を表明してほしいんです」と述べたところ、その方は納得してビラを受け取ってくださった。このとき、以前は選挙に関するビラなんて受け取ろうとしなかった自分が投票への呼びかけをする側になっていることにふと気づき、改めて驚いた。

政治に対する忌避感を超え、運動参加者は対話と情報公開という政治参加の様式を重視しながら自分たちの感覚に合う新しい政治のかたちを少しずつ作り上げていった。その新しい政治のかたちが、（私自身がそうであったように）運動参加者もしくは運動支援者の間にゆっくりと広がっていったからこそ、吉野川住民投票運動は最終的に10万人以上（当時の徳島市の有権者総数の約49%）もの署名を集め、投票の実施にまで至ることになったのであろう。

そして、このような政治に対する考え方の変化を経験した吉野川住民投票運動を母体として、選挙運動という制度政治の領域にまで歩を進めた勝手連という運動体が誕生することになる。住民投票運動と勝手連の連続性について、吉野川住民投票運動の中心的なメンバーであったBさんは次のように述べている。

（2001年）9月の知事選挙でなぜ勝手連ができたのか、…やはりその吉野川の問題っていうのがずっとあって、…吉野川の問題っていうのは国に対して、本来その地域に住む住民にとってもっとも大事であるはずのことが、住民抜きで気がついてみたら進んでいて。…これに対して住民が声を挙げてみたら、自分たちの身近な代表であるはずの市とか県とかの議員が住民の代表じゃなくて、まるで国の代理人であるかのような、…それから知事とか市長とかそういうトップにしても、やはり国の代理人のような形で住民に対する、そういうふうな政治の仕組みというものにぶち当たって

いったということがあるわけで⁷⁾。

Bさんの発言からは、運動に参加した住民がその過程において政治に対する問題意識を育み、身をもって政治を学習してきた経験の足跡を読み取ることができる。運動の過程でこのような政治概念の変容を経験した吉野川住民投票運動は、住民投票の実現および可動堰計画に対する多数の反対という「成功」、そしてある意味では、それらの成功ゆえに敏感に感じざるをえない「第十堰計画がいつ復活するかわからない⁸⁾」という「危惧」の二つの異なる結果を残すことになったのだが、この相矛盾する結果が住民投票運動を勝手連へと連続的に展開させた大きな要因だと教えられる。

4.2 勝手連と政治システムを超えた社会との関係性

吉野川住民投票運動から誕生した勝手連は空洞化しつつある制度政治とは異なるオルタナティブな政治を探究することにおいて、政治システムを超えた社会との関係性を指向し続けることになる。勝手連が最初に選挙活動を行った2001年の県知事選の際、勝手連県民ネットワークの代表世話人の一人であった住友達也氏は、「候補者の押しつけではなく、徳島の未来を決める選択肢が二つあることを知らせる選挙戦にしたい。従来の組織の枠に属さない『普通の住民』の動向が最大の焦点。投票率50%突破を目標に、大田さんへの投票というよりむしろ、県民投票であることを訴えて、どちらを選ぶか判断を仰いでいきたい」（『朝日新聞』2001.8.29 朝刊）と述べている。つまり、勝手連はこの県知事選を勝手連が応援した「大田氏個人に対する投票」ではなく「徳島の未来を決める県民投票」として位置づけていたのである⁹⁾。そして、この位置づけからは、可動堰計画に対して「反対」ではなくあくまで「疑問あり」という姿勢を取り多様な人々との対話をより意識することによって、政治システムを超えた社会に対する強い指向性をもつことになった吉野川住民投票運動のフレーム¹⁰⁾を、勝手連においても採用しようという運動の連続性が窺える。

また、勝手連と政治システムを超えた社会との関係性は「社会的な影響力を喚起して選挙に勝つ」という手段・目的的なものに限らず、「勝手連の運動を通じて社会的な関心を高める」というものにまで及ぶ。なぜなら、勝手連の生命線は選挙の勝敗にではなく、政治システムを超えた社会との関係性にこそ存

在すると考えられるからである。勝手連が敗北した 2003 年の県知事選後、勝手連県民ネットワークの代表世話人の一人であった姫野雅義氏による以下の発言は、勝手連が政治システムを超えた社会との関係性を重視していることをよく物語っている。

勝手連の選挙活動の特徴は、ブラカード作戦⁹²⁾に象徴されるように、有権者個人個人の良心を信じ、自主的判断を尊重する手法にあります。市民を信じ市民の判断にゆだねる運動の発想は、徳島市の第十堰住民投票以来、ぼくたちが一貫して採ってきた方法です。この 5 年間、こういう共同体験を経た徳島市民の政治的成熟度はなかなかのものですよ。なにしろ、個人の判断が集まって出た結果は、良くも悪くも人のせいにするわけにはいかない、というのがいいですね。こうして有権者は政治という舞台上「観客」から「プレーヤー」に変わっていくのでしょうか⁹³⁾。

有権者である住民を「観客」から「プレーヤー」に変える政治空間の変容は、政治システムを超えた社会との関係を抜きにしてはありえなかったであろう。そして、このような関係性は、勝手連が試みた政治参加の様式、具体的に言えば、実際の選挙運動においても同様にみられるものである。合計 3 回の県知事選を経験した勝手連のそれぞれの選挙における共通点や相違点（選挙の争点や運動のスタイルの変化など）について尋ねたところ、熱心に運動に参加していた A さんや C さんからは以下のような返事が返ってきた。

一番最初の選挙は、ほんとうにやっぱりあの自分たちが、選挙やりたかったですね、やっぱり知事を作りたかったというね、すごい意識があって。…だから、やっぱり「自分たちの知事を出そうね」というものすごいこの夢があって。で、あの一、「もう負けて元々」みたいなところが無きにしもあらずでね、「とても素人ができるか」といわれてた選挙で、あの一、やり始めたんだけど、すごく大きな夢をもって駆け抜けられたような気がしますね。だから最終的には負けたんですけども、すごく気持ちがよかったです、このときは。…楽しい経験でしたかね、第一回目は。第一回目が、一番楽しかったかもしれない⁹⁴⁾。

やっぱり、一回目の選挙が一番楽しかったんよね、手作り選挙で、負けたけど。ほらもう、労働組合の、あの一、いろんな人が備わった選挙から、恵まれた選挙からするとすごいきびしい状況のなかでやったんよね。全県下の選挙をするんよね、ちょっと素人が。…もう何がいて何が違反とかもわからんしな、何がいいんか悪いとか、そんななかでやってるから。ま、でも、政策だけはしっかりしたのがあったからね、「とめる、きめる、つくる⁹⁸」っていうやつ⁹⁹。

選挙活動の経験がほとんどない「普通の住民」による「手作り選挙」「素人選挙」は、たしかにノウハウや効率性という点では従来型の「組織選挙」「動員選挙」に比べて見劣りするものだろう。だが、素人による手作りの選挙だからこそ、通常選挙運動においてはあまり語られることのない、「楽しい経験」というオルタナティブな選挙運動を行うことができると考えられる。では、なぜそのような運動が可能になるかという点、素人による手作りの選挙は、参加や直接行動といった参加様式を介することによって、政治システムと同一視される政治ではなく、そのシステムを超えた社会に自身の基盤を置くことができるからである。選挙に関する経験もノウハウも圧倒的に不足しているなかで、そしてある意味ではだからこそ、政治システムのなかではなくその外からやってきた「プレーヤー」たちはみずからの手による選挙のなかで「自分たちの知事を」という「夢」を語ることができたのだろう。このような勝手連の選挙スタイルとそのスタイルがもつ意味について、Bさんは以下のように述べている。

勝手連が関わる選挙、勝手連が関わる政治っていうのは、…従来の政党が行う選挙とどっか違う部分があるんじゃないかなあと。…従来、政党が担ってた選挙っていうのは、…有権者にとってみれば、…どれを選びますかっていうものが与えられて、それに対してこちらを選ぶとかどちらを選ぶかっていう、一票の意味っていうのはそういう意味だった。…勝手連で出てきた選挙の意味っていうのは、やはり、自分たちが徳島という地域で、何がしかの夢とか将来像みたいなものがあって、そういうものを実現していくひとつの大事な機会として、選挙というものに関わっていく。…そういう意味での違いがある⁹⁸。

4.3 勝手連と制度政治との関係性

このように、勝手連は政治システムを超えた社会との関係性を強くもつものだが、勝手連が行うのは選挙運動であるのだから、一方では政治システムのかの制度政治との関係性ももたざるをえない。吉野川住民投票運動から勝手連が誕生した時点で、既にその展開過程において制度政治への接続の契機を見出すこともできるが、選挙運動の経験を重ねていくうちに、勝手連は「手作り選挙」を目指す市民だけではなく、既成の団体・組織をより巻き込んでいくようになる。

労組の側からしたら、自分たちが、あの一、組織としても大きいし、やっぱり物量的にも圧倒的な多数で応援しようのに、なんか勝手連の決めたことに従わないかんことに対する不満とか。勝手連主導で選挙戦が進むことに、あの一、選挙に慣れてる労組を差し置いて、勝手連がなんでも決めてしまうと。しかも決めることが労組からしたら「おかしい」というようなことまで平気で決めてやってしまうと。そういうことに対する不満みたいなんはあったけど、ただ、あのまあ、2回目の（2002年の県知事選の）時は「勝てる」という憶測があったんで、まあ少々の衝突とかそういうなものに対しては目をつぶって、選挙戦を乗り越えれたんやけど⁸⁹。

（3回目の2003年の県知事選のときは）政党とか組織じゃなくて、一人一人の県民に担がれた「勝手連の大田知事」っていうのを売り出したかったんよ、私なんかは。だけど、労働組合はそうはいかんし、大田さん自身も気を遣うんよね。…市民運動してる人たちは「勝手連、言え」と言うし、大田さんの心のなかは、「あまり勝手連、言うては、労働組合の人に悪いだろう」というんがあるんよね。…両方に私なんかはこう気持ちがわかるから、大変だったんよね⁹⁰。

ここで、何も勝手連と既成の組織や団体とによる「協同」の選挙運動を批判したいわけではない。むしろ、勝手連のような制度政治の外側にいるアクターと政治参加の経験をもつ労組のような制度政治の中にいるアクターとの協同は、「サブ政治」と制度政治との関係においてかなり高い割合で生じるものだと考

えられる。以下では、成元哲（1998）による「脱政治化と再政治化」の議論を参照して、この関係性について考える。

成は新潟県巻町の新発建設に関する住民投票運動から、「脱政治化と再政治化」という二つの契機を見出している。成によると、住民投票という戦略は新発建設に関するリスクを保革対立という従来の制度政治からいったん切り離し、自分の身体や健康・地域社会の将来・生活スタイルといった生（生活）に関する個人の自己決定の問題として再構築する。そのうえで、さらに投票結果を制度政治に反映させる再政治化がなされていくのである。そして、彼は以下の点を強調する。

運動の成功のためには、脱政治化は必要条件であって十分条件ではない。運動が制度政治の境界に挑戦し、制度政治の配置を変化させないと、運動の要求は十分達成できない。運動がその展開過程で制度的手続きに接続することによって、運動の成果が実行力あるものとなる。（成 1998：68）

脱政治化と再政治化の過程でみられる「制度的手続きへの接続」「制度政治の配置の変化」といった政治空間の変容は巻町と同様に吉野川住民投票運動においてもみられたものだが、このような経験が後の勝手連に直接的につながっていったと考えられる。住民投票運動と勝手連の共通点や相違点について尋ねたところ、「選挙運動」としての勝手連に言及するなかで、Aさんは以下のように語ってくれた。

まあ、たいていの人は、「自分の一票は入れに行くけど、そこまで（選挙運動）はね」っていうのが、たいていの人の考えだったんですけど。もう勝手連のあれ（運動）を始めようというときになったときにはね、「もう、自分たちの手で変えなければ」と。まあ、その前の市民ネットワークのね、あのときからそうなんですけどね⁶⁸、…で、やっぱりあの時も住民投票させてくれないから、「議員を変えなきゃだめなんだ」っていうことで、市民ネットの議員を出したわけですよ。ほしたら、現に変わったわけですよ。で、状況が変わって、あの住民投票も出来たわけですよ。で、自分たちの手で変えられたんだと。うん、そういうこう何て言うのかな、達成

感みたいなのがそのときにすごくあって、じゃあ、あの可動堰問題がどうしてもそのあと動かないとなったら、やっぱり県の方も変えなきゃだめだという、それは大きいでしょうね⁸⁰。

このように、住民投票において示された住民の意思とその意思が完全には実現されないという乖離が、勝手連を通じて住民投票運動に参加した人々をより強く制度政治に接続することになったと考えられるのである。

5. まとめ

これまでみてきたように、勝手連は政治システムを超えた社会や政治システムのなかの制度政治との関係をもつのだが、勝手連は単に社会と制度政治のそれぞれと関係をもつというより、この二つを媒介する機能をもっているのではないか。Alberto Melucci は現代の運動の動員的特徴として、「公的なチャンネルを避けることなく、自身の行為により適した代表制のチャンネルを創造することに取り組む」(Melucci 1996 : 309) ことを挙げているが、公的なチャンネルと新たに創造されたチャンネルとの並置は吉野川住民投票運動や勝手連の展開過程においてみられ、この二つのチャンネルの並置は政治システムを超えた社会と制度政治とを媒介しうると考えられるからである。下の図2は、政治システムを超えた社会と制度政治とを媒介する勝手連を示したものである。

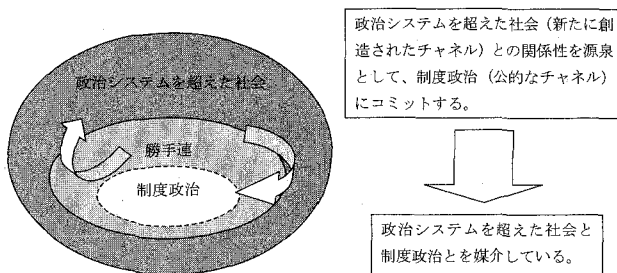


図2 政治システムを超えた社会と制度政治とを媒介する勝手連

つまり、「住民運動が切り開いた政治空間において、勝手連がもたらしたも

のは何であったのか」という最初の問いに戻ると、次のようなことが言えるのではないだろうか。それは、「政治システムを超えた社会に自身の基盤を置きつつ、制度政治にコミットメントすることによって、勝手連は政治システムを超えた社会と制度政治とを媒介することになったのではないか」ということである。

本稿では徳島県で生じた勝手連という事例に対する考察を通じて、「政治システムを超えた社会と制度政治との媒介」という知見を提出した。このような媒介性が要請されるようになった背景として、Zygmunt Bauman は「生活政治が大文字の政治とぶつかり、個人的問題が公的言語に翻訳され、合意され、実行される ^{おおやけ}公 と ^{わたくし}私 の中間点、公共空間、公共広場が消滅したこと」(Bauman 2000=2001: 51) を指摘している。公共空間の消滅に瀕している状況に際し、住民運動という主体はみずから切り開いた政治空間において、個人的問題(生活政治)を公的言語(大文字の政治)に翻訳しようと「勝手に」運動を展開したわけだが、現在生じている政治システムの再編過程を考慮するのなら、このような現象は他の地域でも生じる可能性があるといえるのではないだろうか。

<参考文献>

- Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity Press. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店。)
- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt: Suhrkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局。)
- Beck, Ulrich, Anthony Giddens and Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge: Polity Press. (=1997, 松尾精文ほか訳『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房。)
- Beck, Ulrich, 1997, *The Reinvention of Politics: Rethinking Modernity in the Global Social Order*, Cambridge: Polity Press.
- Beck, Ulrich, Wolfgang Bonss and Christoph Lau, 2003, "The Theory of Reflexive Modernization: Problematic, Hypotheses and Research Programme," *Theory*,

Culture & Society, 20(2) : 1-33.

樋口直人, 2004, 「テクノクラシーと底辺民主主義の狭間で——徳島県知事選の政治社会学的考察」『徳島大学社会科学研究』17 : 199-206.

姫野雅義, 2001a, 「吉野川可動堰——計画は中止されたか」五十嵐敬喜・小川明雄編『公共事業は止まるか』岩波書店, 32-40.

——, 2001b, 「住民投票が市民を鍛える——吉野川河口堰をめぐる」筑紫哲也編『＜政治参加＞する7つの方法』講談社, 77-103.

Holzer, Boris and Mads P. Soresen, 2003, "Rethinking Subpolitics: Beyond the 'Iron Cage' of Modern Politics?," Theory, Culture & Society, 20(2) : 79-102.

五十嵐敬喜・小川明雄編, 2001, 『公共事業は止まるか』岩波書店.

今井一, 2000, 『住民投票——観客民主主義を超えて』岩波書店.

樺嶋秀吉, 2004, 『採点! 47 都道府県政』平凡社.

勝手連県民ネットワーク, 2003, 「徳島県知事選挙法定ビラ1号」.

久保田滋ほか, 2002, 「住民投票と地域住民——吉野川可動堰建設問題に対する徳島市民の反応をめぐる」『徳島大学社会科学研究第15号』, 161-255.

Melucci, Alberto, 1996, Challenging Codes: Collective Action in the Information Age, Cambridge: Cambridge University Press.

Offe, Claus, 1985, "New Social Movement: Challenging the Boundaries of Institutional Politics," Social Research, 52(4) : 817-68.

大畑裕嗣, 2004, 「モダンティの変容と社会運動」曾良中清司ほか編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂, 156-89.

成元哲, 1998, 「『リスク社会』の到来を告げる住民投票運動」『環境社会学研究』4 : 60-75.

成元哲ほか, 2003, 「政治的機会構造と文化的フレーミングの統合モデルをめざして——戦後日本の住民運動の盛衰と抗議レパトリーを事例として」『徳島大学社会科学研究』16 : 1-30.

高木竜輔, 2004, 「『住民投票』という名の常識へ——社会運動のフレーム抗争」大畑裕嗣ほか編『社会運動の社会学』有斐閣, 117-32.

徳島自治体問題研究所編, 1999, 『第十堰のうた——吉野川の河川事業を考える』自治体問題研究所.

横路孝弘と勝手に連帯する若者連合＝「勝手連」編, 1983, 『われら「勝手」

に連帯す——甦れ、北海道のフロンティア』幸洋出版。

安田浩一, 2003, 「徳島県知事選 19 万票の行方——苦渋と安堵の大田・前知事と活気に満ちた勝手連」『労働情報』625 : 10-2.
吉野川だより編集室, 1999, 「吉野川だより」No.83.

-
- (1) 吉野川住民投票運動の経緯については、徳島自治体問題研究所編 (1999)、今井 (2000)、姫野 (2001a) (2001b)、久保田ほか (2002) を参照。
 - (2) 2003 年 11 月 25 日 (火) に行った A さんへのインタビューより抜粋。なお、() 内は、筆者が補足したもの。
 - (3) 勝手連県民ネットワーク, 2003, 「徳島県知事選挙法定ビラ 1 号」より抜粋。
 - (4) 「更なる近代化に対する『近代的な』批判」を論じているものとして、Bauman (2000=2001)、大畑 (2004) などを参照。
 - (5) 住民投票に際して出された、吉野川シンポジウム実行委員会発行のビラより。
 - (6) 2003 年 11 月 25 日 (火) に行った A さんへのインタビューより抜粋。() 内は筆者が補足したもの。
 - (7) 2003 年 8 月 25 日 (月) に行った B さんへのインタビューより抜粋。() 内は筆者が補足したもの。
 - (8) 住民投票後も、建設省は「一度計画は白紙」に戻すとしても「可動堰そのものは否定されず」という姿勢を取り、可動堰計画を選択肢のひとつとして残し続けた。また、当時現職であった圓藤県知事も可動堰推進の立場を崩さなかった。
 - (9) また、勝手連が大田氏という「普通の人」を候補者とした (意図せざる) 含意については、樋口 (2004) を参照。
 - (10) フレームという概念は Erving Goffman のフレーム分析を社会運動の分析に応用したものであり、「個人や集団が事象や出来事を意味づけすることによって、経験を組織し行為を導くことを可能にする解釈図式を指す」(成ほか 2003 : 10)。また、吉野川住民投票運動のフレーム分析については、高木 (2004) を参照。
 - (11) 住民投票運動の際、「123 (住民投票の実施日であった 1 月 23 日を表したもの)」「住民投票」と書かれたプラカードを持った人々が道端に立つという運動のスタイルがみられた。これがいわゆるプラカード作戦であり、この運動スタイルは勝手連にも引き継がれた。
 - (12) 吉野川だより編集室, 2003, 「吉野川だより」No.83 より。
 - (13) 2003 年 11 月 25 日 (火) に行った A さんへのインタビューより抜粋。
 - (14) 2001 年 9 月の県知事選の際に、大田陣営 (勝手連) が出したキャッチフレーズ。可動堰計画の中止、公共事業への住民意見の反映、自然回復型経済モデルの創出などが具体的な政策の柱であった。
 - (15) 2003 年 10 月 25 日 (土) に行った C さんへのインタビューより抜粋。
 - (16) 2003 年 8 月 25 日 (月) に行った B さんへのインタビューより抜粋。
 - (17) 2003 年 11 月 10 日 (月) に行った D さんへのインタビューより抜粋。() 内は筆者が補足したもの。
 - (18) 2003 年 10 月 25 日 (土) に行った C さんへのインタビューより抜粋。() 内は筆者が補足したもの。
 - (19) 1999 年 2 月、徳島市議会でも可動堰計画に関する住民投票条例案が否決された。これを受け、住

民投票運動の参加者は「市民ネットワーク」という組織を新たに作り、条例案を議会で成立させようと独自の候補者を擁立するなどしてその2ヶ月後の市議選に臨んだ。そして、市議選の結果、住民投票賛成派議員は過半数を突破することになる。この経緯は、成が論じる「制度的手続きへの接続」「制度政治の配置の変化」にまさに該当すると考えられる。

② 2003年11月25日（火）に行ったAさんへのインタビューより抜粋。（ ）内は筆者が補足したもの。